

青森県埋蔵文化財調査報告書 第189集

# 白砂遺跡

平成7年度

青森県教育委員会





















## 第Ⅱ章 周辺の遺跡と地質

### 第1節 周辺の遺跡

本遺跡を中心として半径5キロメートル内には、大間町の25箇所と風間浦村の3箇所を併せて28箇所の遺跡が周知されている。その概要は第1表の如くである。これらの中で、考古学的な調査、報告がなされて文献がある所は、大間遺跡、割石遺跡、ドウマンチャ貝塚、鳥間遺跡、奥戸遺跡、白砂遺跡、小奥戸(1)遺跡、小奥戸(3)遺跡である(県教育委員会『青森県遺跡地図』:1992)。これらの考古学的調査、報告は、昭和20年代からはじまり、昭和30年代にかけては江坂輝弥氏と慶応義塾大学によって行われた。昭和40年代から50年代にかけては、地元の橋善光氏が精力的な活動を行った地域である。その後、大間原子力発電所建設の計画に伴って、埋蔵文化財の分布・試掘・発掘調査が実施されるようになったのである。

これまでの調査、報告を見る限り、本遺跡周辺の遺跡の特徴は、縄文、弥生から平安時代のいずれの時代にもかかわらず、出土遺物のなかに北海道と係わりが深い遺物、特に土器が混在していることである。例えば、縄文時代前期初頭の東劔路IV式土器(小奥戸(1)遺跡)、弥生～古墳時代の後北式土器・北大式土器、奈良・平安時代の撤文土器などがそれである。本遺跡もこのグループに含まれているようである。

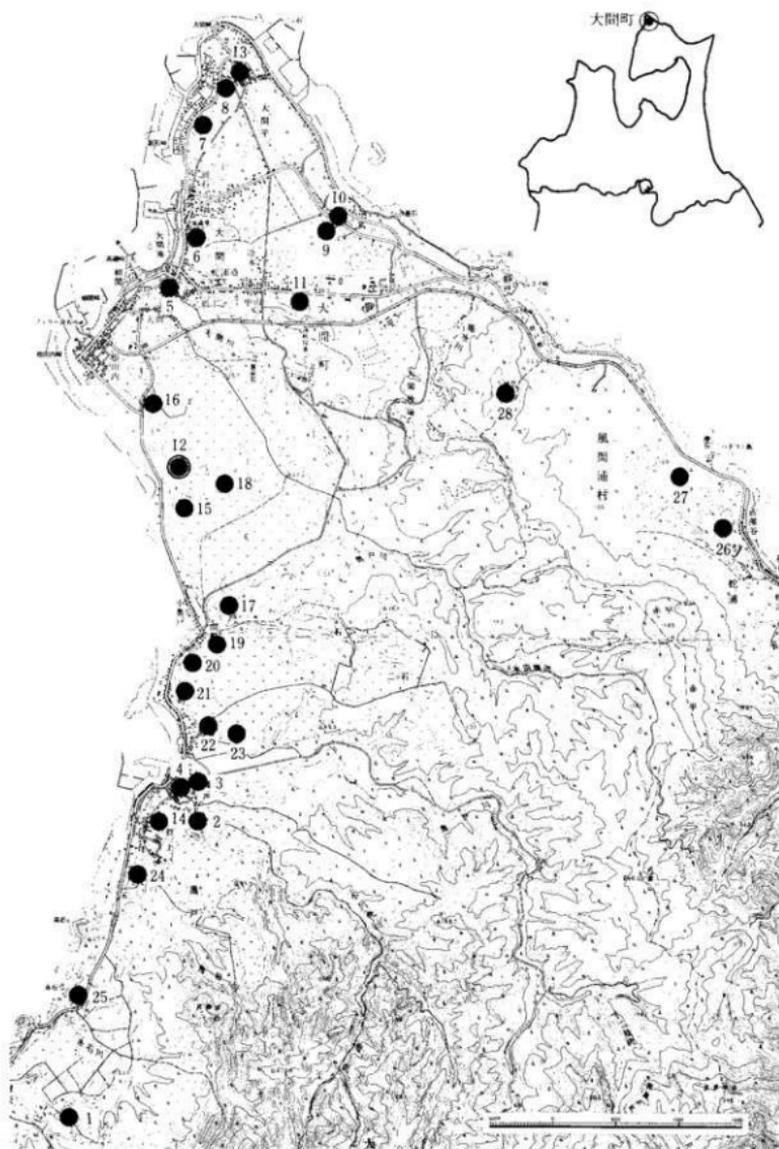
(北林 八洲晴)

#### 《参考文献》

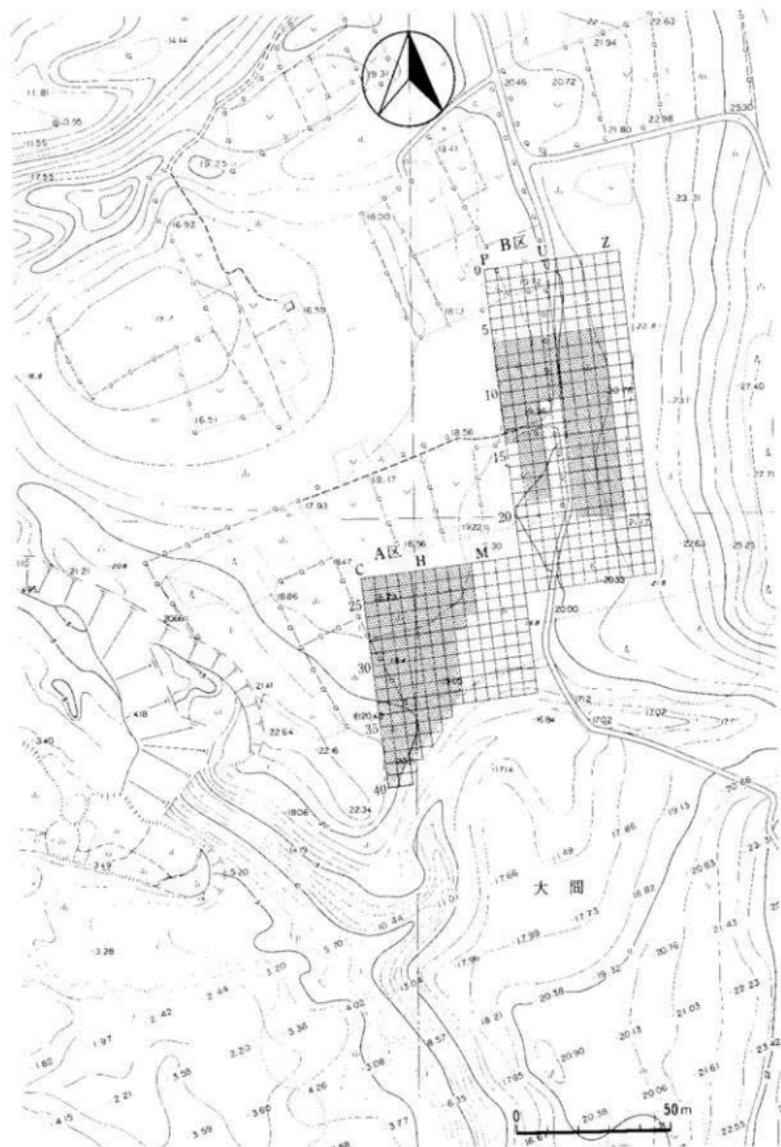
刊行年月	編 著 者 名	題 名	書 名	巻 号	備 考
1 9303	青森県教育委員会	小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書	第154集	
2 9103	同 上	大間原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財調査報告書	同 上	第139集	白砂、小奥戸(1)・(3)
3 7903	橋 善光 外	青森県鳥間遺跡第1次調査報告書	北海道考古学	15	
4 7701	橋 善光	青森県大間貝塚	うそり	14	
5 7605	橋 善光	大間貝塚第3次調査概報	考古風土記	1	
6 7504	同 上	青森県大間町奥戸出土の整文式土器	北奥古代文化	7	
7 7503	同 上 外	第2次大間貝塚調査概報	北海道考古学	11	
8 7409	同 上	青森県大間貝塚調査概報	考古学ジャーナル	99	
9 7303	橋 善光	大間崎鳥間遺跡の土器について	北海道考古学	9	
10 6703	江坂 輝弥 外	大間町ドウマンチャ貝塚	下北(九学会連合)		
11 6601	渡辺 誠	下北半島割石遺跡採集の整文土器について	考古学雑誌	51-3	
12 5007	江坂 輝弥	大間貝塚発掘記	貝塚	25	

表1 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	中世	近世	種別	備考・文献
			前期	中期	後期	晩期	不明									
1	林木					○								散布地		
2	小川代					○					○			配石以降		
3	焼塚					○		○						散布地		
4	奥戸						○							散布地		
5	大岡						○	○	○		○			散布地	4, 5, 7, 8, 12	
6	冷水			○		○	○	○						散布地		
7	割石										○			散布地	11	
8	島岡							○						散布地	3, 9	
9	ドロマンチ					○	○							貝塚	10	
10	大岡平(1)							○			○			散布地		
11	大岡平(2)			○										散布地		
12	白砂							○	○	○	○	○		散布地	標第139集(標第139集)	
13	四十八館跡											○		城跡		
14	奥戸館跡											○		城跡		
15	小奥戸(1)			○	○	○		○	○	○	○			兼石2基、土坑3基	標第154集	
16	奥戸上道						○				○			散布地		
17	小奥戸(2)										○			散布地		
18	小奥戸(3)			○		○	○							散布地		
19	二ツ石(1)							○						散布地		
20	二ツ石(2)										○			散布地		
21	二ツ石(3)										○			散布地		
22	二ツ石(4)						○							散布地		
23	田頭										○			散布地		
24	船橋							○						散布地		
25	黒岩							○						散布地		
26	古釜谷平				○						○			散布地	風間郷村	
27	落石				○	○								散布地	風間郷村	
28	折戸神社				○	○								散布地	風間郷村	



第1図 白砂遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡周辺の地形とグリッド配置図

## 第2節 遺跡周辺の地形と地質

青森県立郷土館 佐藤 巧

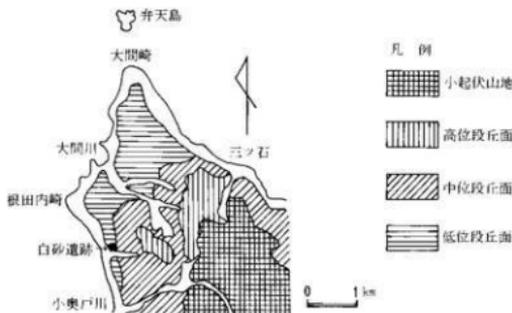
本遺跡は、本州最北端大間崎の南方約3.5kmの津軽海峡に面した、標高約20mの海岸段丘面上に位置している。大間崎周辺の海岸段丘については、大矢・市瀬（1957）が「下北半島の海岸地形」で

高位平坦面	上位	標高160m～150m
	下位	110m～90m
第3段丘		90m～70m
第3段丘・第4段丘中間面		50m～40m
第4段丘		40m～20m
第5段丘		20m～10m

に分類しており、高位平坦面は遺跡東方の赤平地域に、第3段丘は小奥戸川南部のニツ石原野に分布するとしている。また第4段丘はこの地域に最も広く分布するもので、海岸線沿いに約1,500m～1,000mの幅で南方の佐井地区まで続くとし、第4段丘上には比高約10mの第3・第4段丘の中間面が存在するとしている。第5段丘は大間崎付近に広く分布し、大間の町もこの面上ののっているとしている。

本調査では、遺跡を中心に小奥戸川以北の海岸地域を現地踏査した。調査地域には、大間崎から南方内陸部に向かい3段の段丘と高低差が少ない小起伏山地がみられる。すなわち標高10m～20mの低位段丘、20m～40mの中位段丘、50m～70mの高位段丘と標高70m以上の小起伏山地である。今回の調査で低位段丘としたのは、大矢・市瀬の第5段丘に対比され、中位段丘は第4段丘に、また高位段丘は第3・第4段丘の中間面に相当するものである。大矢・市瀬の第3段丘は調査地域には発達していない。

これらの基盤を構成しているのが新生代第三紀中新世後期（約1,000万年～500万年前）に堆積した大間層、易国間安山岩類と更新世（170万年～1万年前）の段丘堆積物である。大間層は海成堆積物である泥岩（硬質頁岩）を主体とした地層で、大間崎周辺、大間川上流域および南部の山地に分布している。易国間安山岩類は、安山岩質凝灰角礫岩を主体とし、風間浦村蛇浦を模式地とする地層で、遺跡周辺では小奥戸川北部で確認することができる。段丘堆積物は礫・砂・粘土等で構成されている。



第3図 遺跡周辺地形分類図

本遺跡が立地する場所は、標高約20mの低位段丘面上であるが、その地下を構成している堆積物は、上位から、黒色土・暗褐色土・褐色土互層、青灰色粘土層、褐色ローム層、赤褐色～褐色細粒砂層、暗褐色砂礫層、灰白色・赤褐色砂礫層となっている。

#### 黒色土・暗褐色土・褐色土互層

層厚 互層全体で約335cm

30～60cmの暗褐色土層を最下位とし、上位に5～30cmの黒色土、暗褐色土、褐色土の互層が重なる。暗褐色土層は場所により分化し、最大で5層まで数えることができる。また地表から180cmに位置する約20cmの黒色土層は、遺跡周辺・内部で追跡できる鍵層となる土層である。

#### 青灰色粘土層

層厚 約20cm

灰白色～灰色～青灰色と色相が変化する粘土層であるが、連続性に欠く。

#### 褐色ローム層

層厚 約180cm

褐色～暗褐色を呈するが、乾燥により黄褐色となる。

#### 赤褐色～褐色細粒砂層

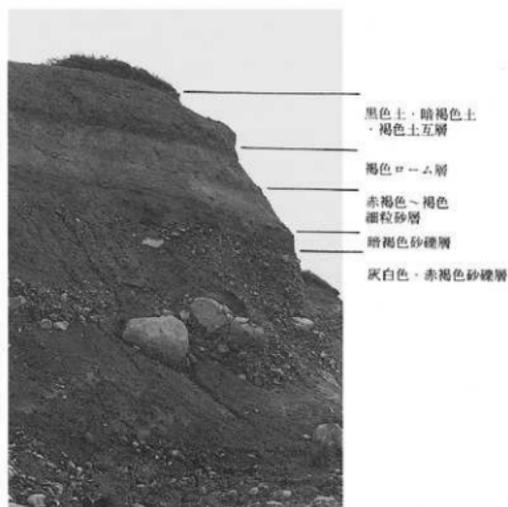
層厚 約200cm

ローム質な細粒砂で、半固結状態である。

#### 暗褐色砂礫層

層厚 約100cm

安山岩、石英安山岩、シルト岩、凝灰岩、泥岩の細礫～中礫を含む砂礫層である。

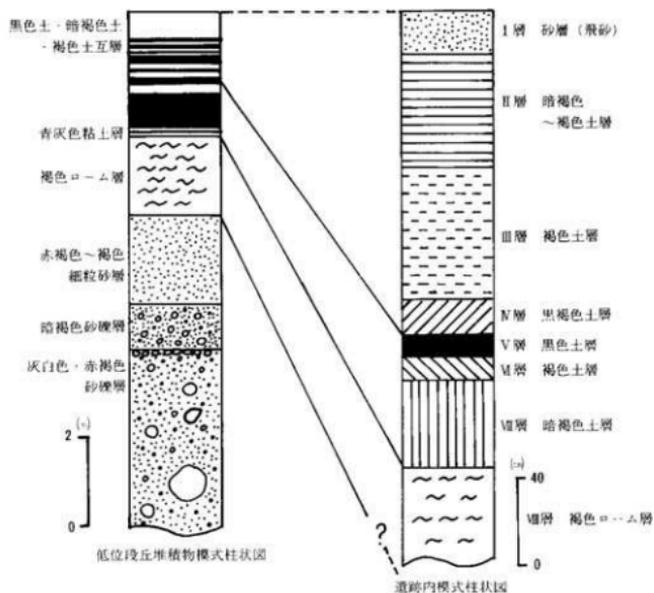


低位段丘堆積物



引用文献

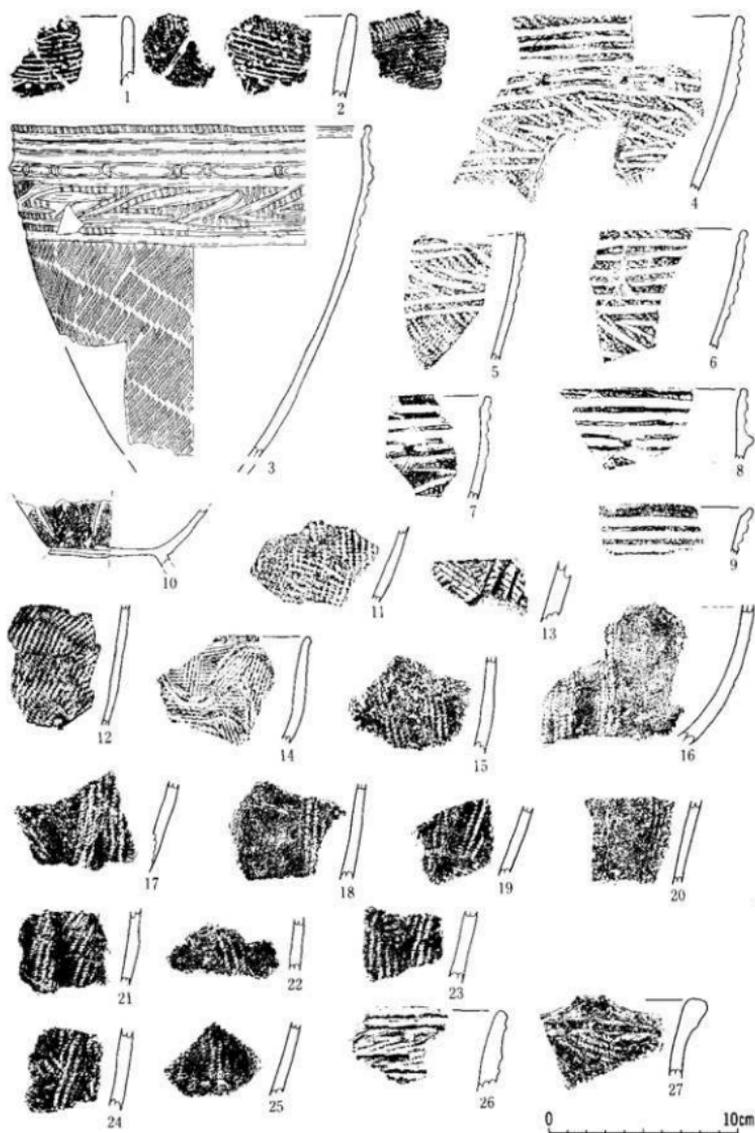
大矢雅彦・市瀬由自（1957） 下北半島の海岸地形， 第2報， 資源科学研究所彙報第43—44号



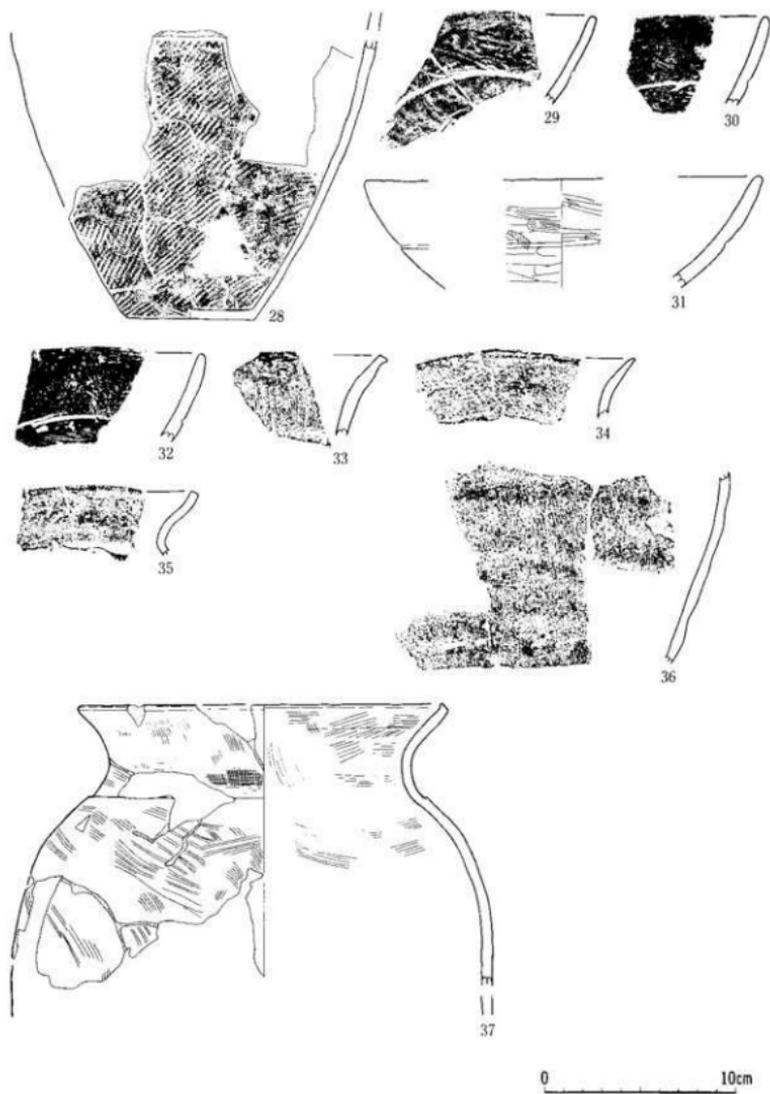
第4図 柱状模式図



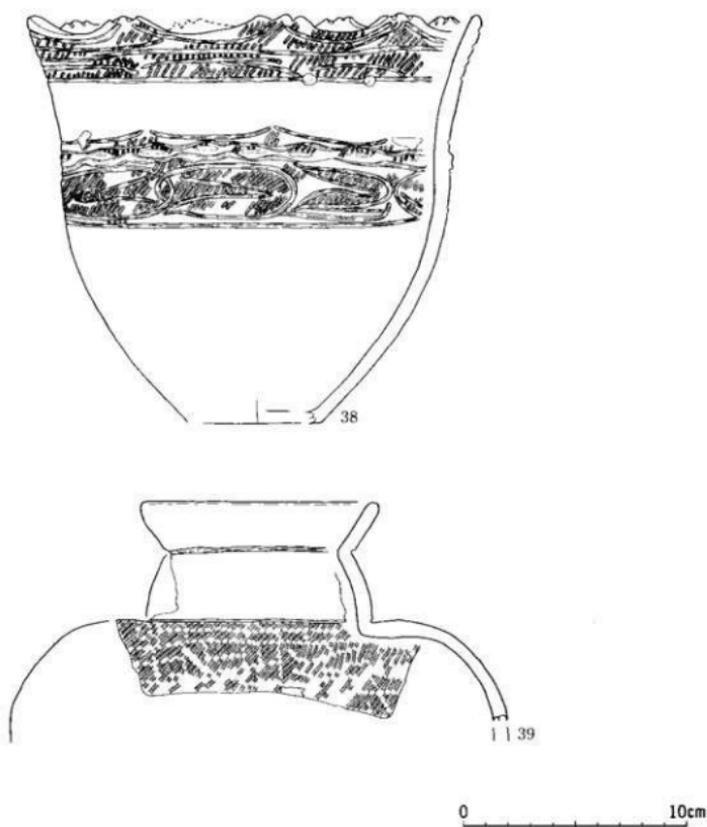




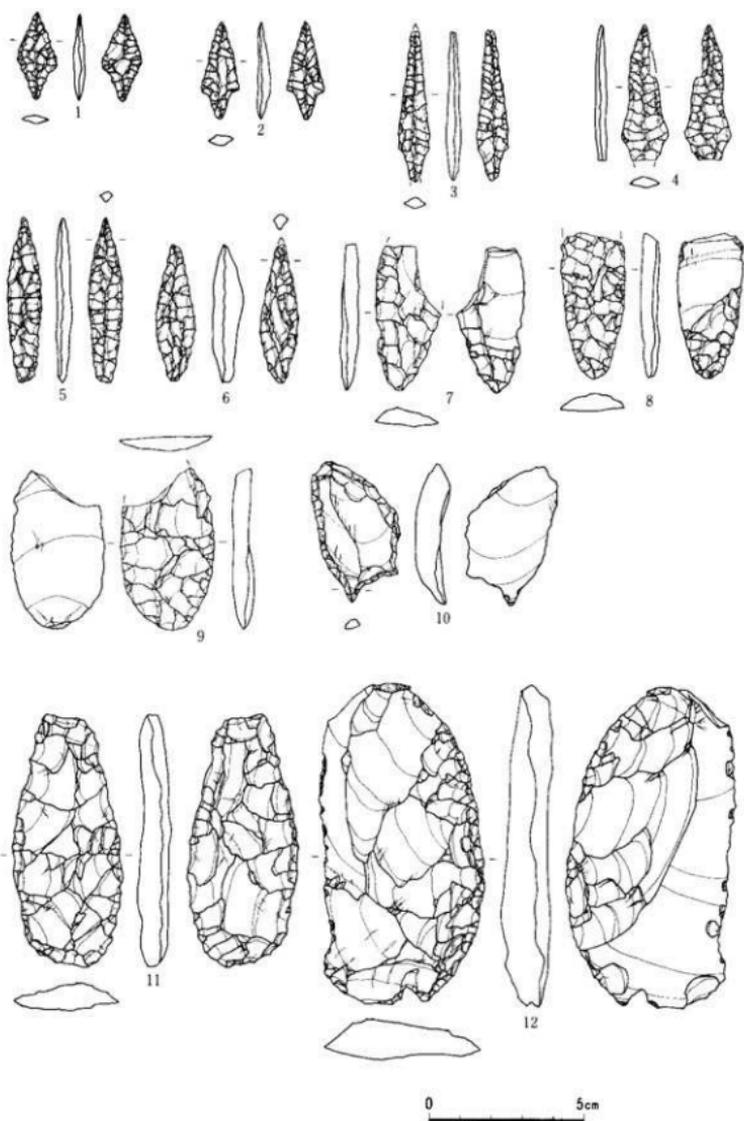
第5圖 出土土器(1)



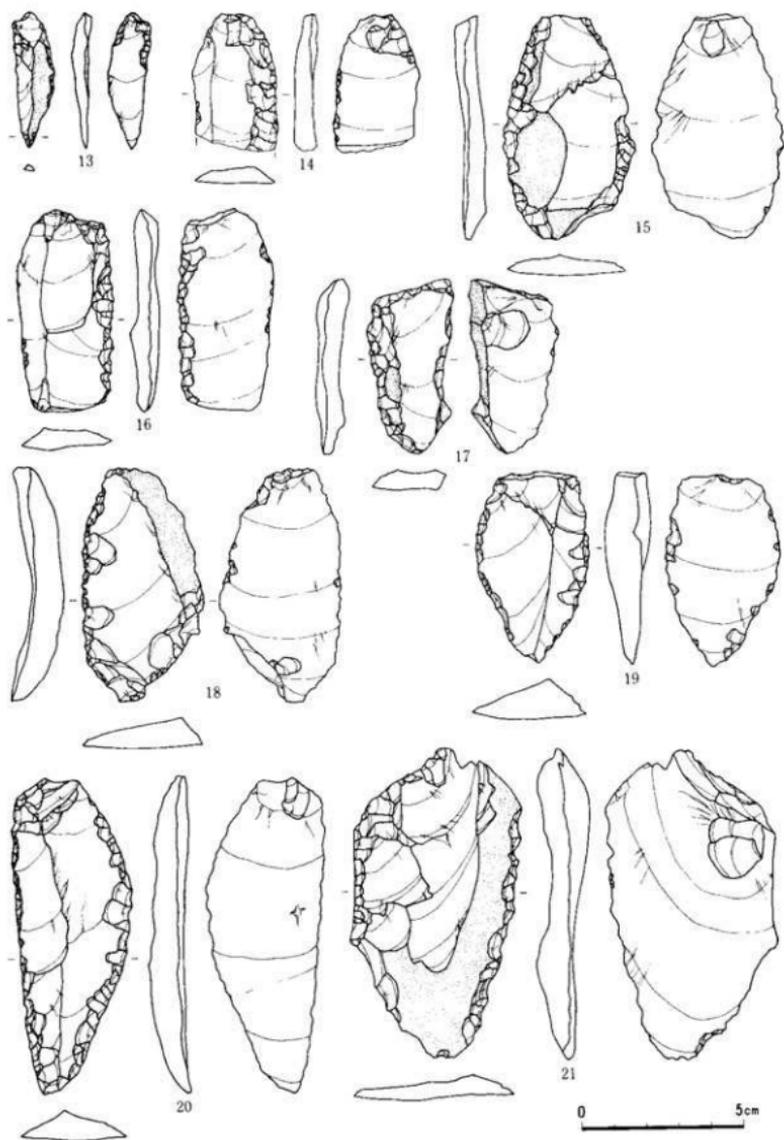
第6圖 出土土器(2)



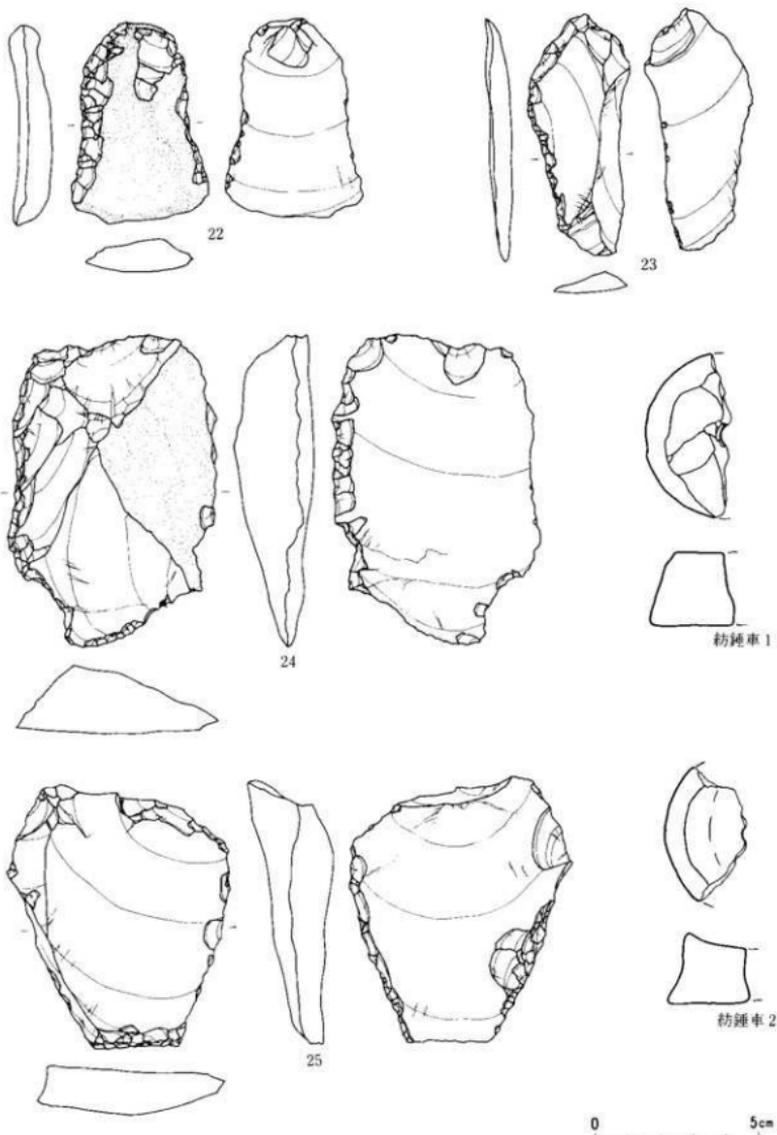
第7図 白砂遺跡から採集された土器（大間町立大間小学校保管）



第 8 图 出土石器(1)



第9圖 出土石器(2)



第10図 出土石器(3)・紡錘車

表2 白砂遺跡出土石器一覧表

番号	器種	グリッド	層位	石質	重さ(g)	備考
1	石鎌	Q-9	M	珪頁	0.9	
2	石鎌	D-28	N	珪頁	1.3	
3	石鎌	I-31		珪頁	2.0	
4	石鎌	C-25	N	黒曜石	1.6	基部一部欠損
5	石鎌	C-25	VI	珪頁	2.7	
6	石鎌	F-27	VI	流紋岩	4.1	
7	石槍	F-31	II	珪頁	5.4	欠損(1/2)
8	石槍	E-31	II	珪頁	6.5	欠損(1/3)
9	石槍	F-34	II	流紋岩	9.8	欠損(1/3)
10	石槍	E-31	N	珪頁	9.8	
11	石槍	E-31	N	珪頁	34.3	先端部欠損
12	不定形スクレイパー	S-6	III	珪頁	97.8	
13	不定形スクレイパー	E-31	N	珪頁	2.0	
14	不定形スクレイパー	E-34	II	珪頁	8.6	半欠
15	不定形スクレイパー	C-31	III	珪頁	19.7	
16	不定形スクレイパー	S-10	III	珪頁	16.4	
17	不定形スクレイパー	C-31	III	珪頁	15.8	
18	不定形スクレイパー	F-27	III	珪頁	28.1	
19	不定形スクレイパー	D-34	II	珪頁	23.1	
20	不定形スクレイパー	F-31	II	珪頁	32.0	
21	不定形スクレイパー	D-34	N	珪頁	59.1	
22	不定形スクレイパー	I-25	II	珪頁	29.8	
23	不定形スクレイパー	T-7	III	珪頁	14.6	
24	不定形スクレイパー	F-28	VI	珪頁	126.9	
25	不定形スクレイパー	E-28	VI	珪頁	91.9	

※ 珪頁は珪質頁岩の略。

### 第3節 白砂遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

白砂遺跡から出土した3点の火山灰試料の分析結果について報告する。

分析値は表1にまとめられている。白頭山火山灰か、十和田a火山灰かの判断にはK、Ca、Rb、Srの長石系4因子が有効である。

図1にはRb-Sr分布図を示す。今回分析した試料は3点とも、白頭山領域に分布する。このことは図2のK-Ca分布図でも確かめられる。したがって、3点の試料は白頭山火山灰である。

念のため、風化因子を調べてみると、Naの分析値はいずれも、1.0以上であり、風化による影響はほとんど認められない。Fe因子も白頭山領域にはびつたり対応しており、土壌による汚染もほとんどなかった試料であることを示している。この結果、図1・2では3点とも、白頭山領域に対応したのである。

表1 大間町白砂遺跡出土火山灰

試料番号	出土位置	出土層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定結果
No. 1	C-31	II層下部	1.05	0.352	2.61	0.992	0.109	1.15	白頭山
No. 2	D-30	II層下部	1.06	0.349	2.58	1.03	0.108	1.19	白頭山
No. 3	C-30	II層下部	0.970	0.273	2.63	1.17	0.171	1.14	白頭山

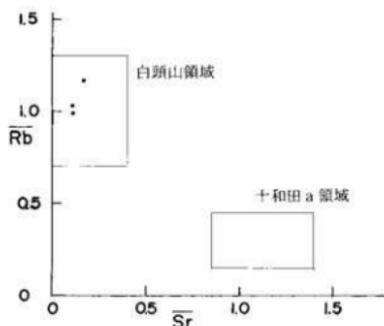


図1 Rb-Sr分布図

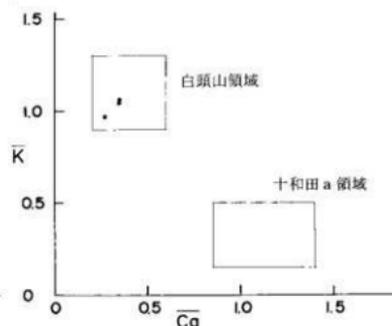


図2 K-Ca分布図





遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（南から）



調査風景

写真 1



火山灰出土状況



土器出土状況（縄文土器）



土器出土状況（土師器）

写真 2

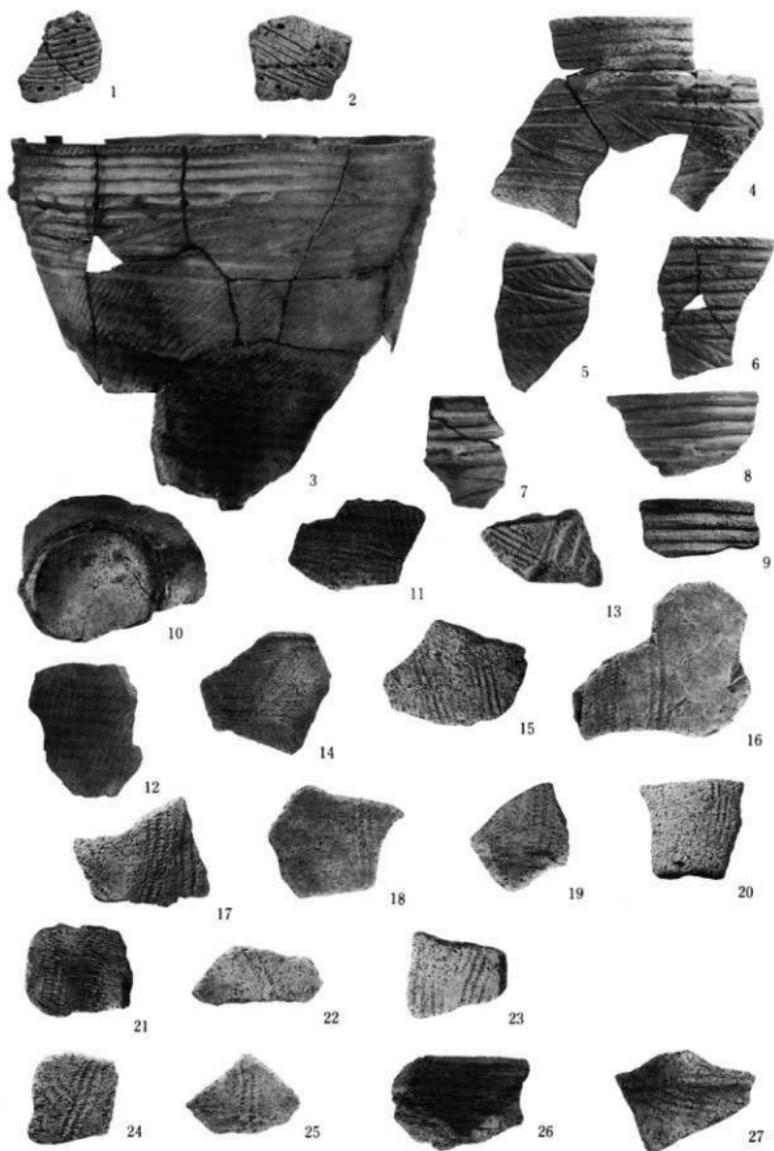


写真 3 (土器)

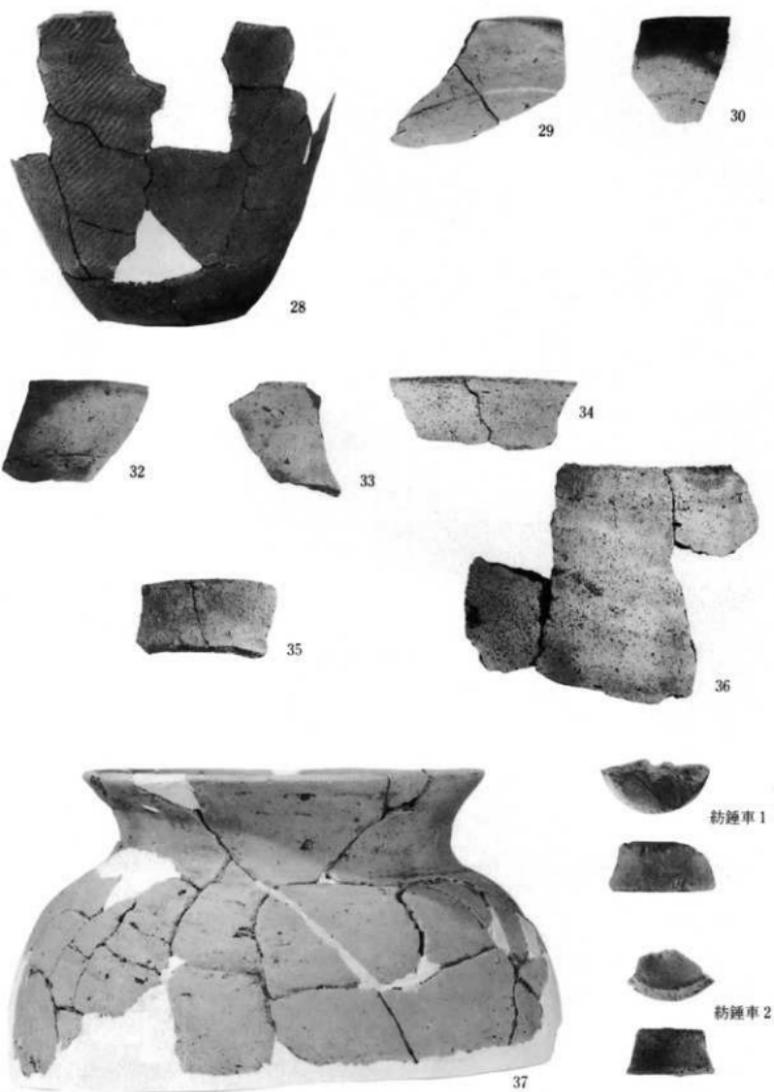


写真4 (土器・紡錘車)

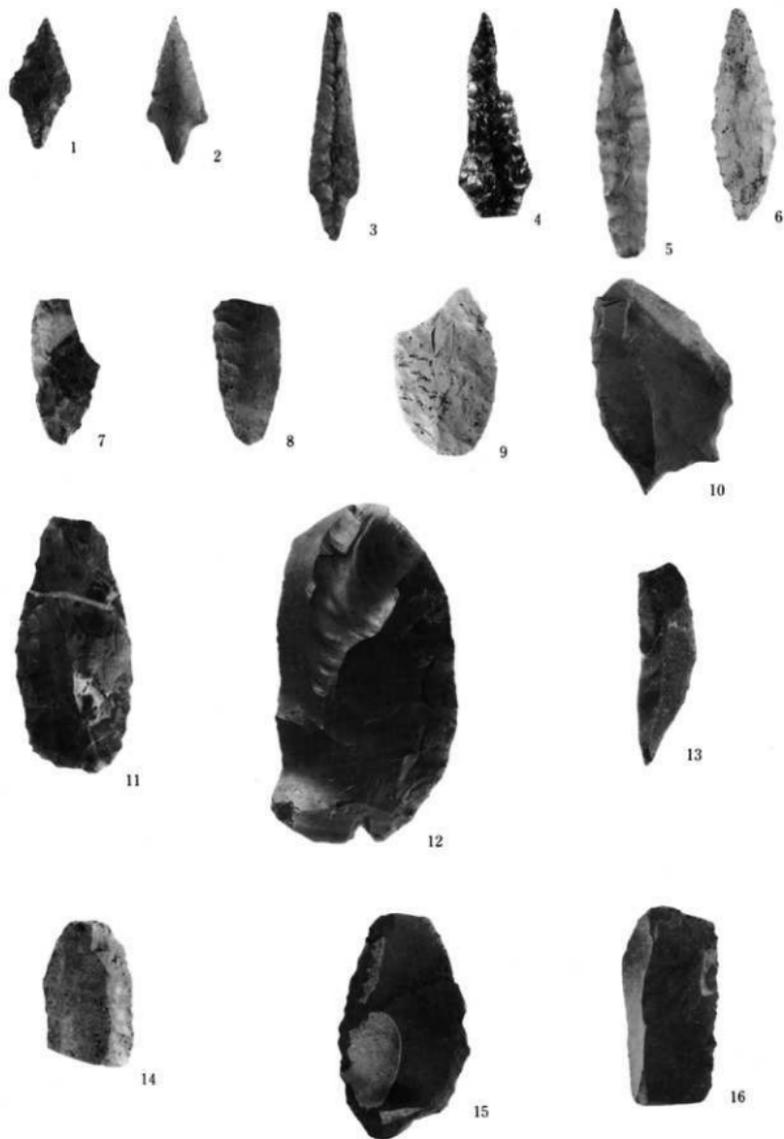


写真 5 (石器)



17



18



19



20



21



22



23



24



25

写真 6 (石器)

## 報告書抄録

ふりがな	しろすないせき
書名	白砂遺跡
副書名	大間原子力発電所建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第189集
編著者名	北林八洲晴、木村鐵次郎
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所以遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白砂遺跡	青森県ト北部大間 町大字大間字奥戸 下道10-22, 36	02-423	52012	41度 30分 47秒	140度 56分 47秒	19940509 ～ 19940722	3,000㎡	大間原子力発電所 建設事業に伴う事 前調査

所以遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白砂遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器(晩期) 石器	
		弥生時代		縄縄文式土器(後北式)	
		奈良時代		土師器	





